

もうすぐ春である。歌の歌詞ではないが、確かにそれはもう、すぐそこまで来ている。  
この時期、会社の朝礼で社長は毎年のように言う台詞がある。  
「三寒四温の通り季節の変わり目で云々・・・」

それはともかく、この「すごしやすい春」だというのに、私の心は決してスッキリと晴れ渡ってはいない。  
暖かい日差しの中で、理由も無く感じ、思い起こさせるものがあるのだ。それは「過去」。

この時期はよく、「出会いと別れの季節」とも言われている。それもあるだろう。  
気候は穏やかで草木が芽を出し、桜が咲き誇り、1年のうちでこんなにも美しい瞬間であるにも関わらず、

何故か心は寂しく儂く、そして甘酸っぱい感じなのである。

理由の一つとして、もう十年近くも昔の話になるが、丁度この季節に失恋を経験したことがある。  
二人で桜の下を歩き、語り、幸せな時を過ごした。我ながら青春していたなあ、と振り返るが、  
結局、その結末は笑えるほどあっけなかった。  
この経験がトラウマになっているのか、とにかく桜を見る度に切なさを感じる。

しかし最も大きな理由は、梁川とアメリカで過ごした日々を、些細なきっかけで思い起こすからだと思う。  
梁川に付いては何度か記しているが、とにかく忙しく、且つ刺激的な活動であった。  
何より、その活動の舞台となったワシントン州、シアトル近郊は限りなく美しく、輝いていた。  
それは自然ばかりでなく、街や関わった人々についてもである。

忙しかった。そして未経験の仕事ではあったが、恐縮ながらよくやったと思う。  
今となっては梁川と口論した出来事さえ懐かしく、微笑ましく感じる。  
あえて形容するなら、「猛進」であったと思う。わき目も振らず、毎日毎日が瞬く間に過ぎていった。  
そんな中で垣間見た、人の温かさや、ふと見上げた時の空の美しさに心から感動した。

しかしだからこそ今、あの時を思い出すと「切ない」のである。  
あの瞬間はどんなに望んでも、もう二度と戻ることは無い。  
言い替えれば、感傷に浸るほど「あの時」は自分にとって大切な経験であったという証なのか。  
願わくば、梁川自身も同じ気持ちであってくれたなら、と思わずにいられない。

いずれにせよ、である。  
もし私自身がこの仕事を選んでいなければ、こんなにも大切な思い出をつくり得ただろうか。  
それを考えた時、レース業という職に心から感謝と畏敬の念を禁じ得ない。

春は痛い。でもそれは、決して嫌な痛みではない。